

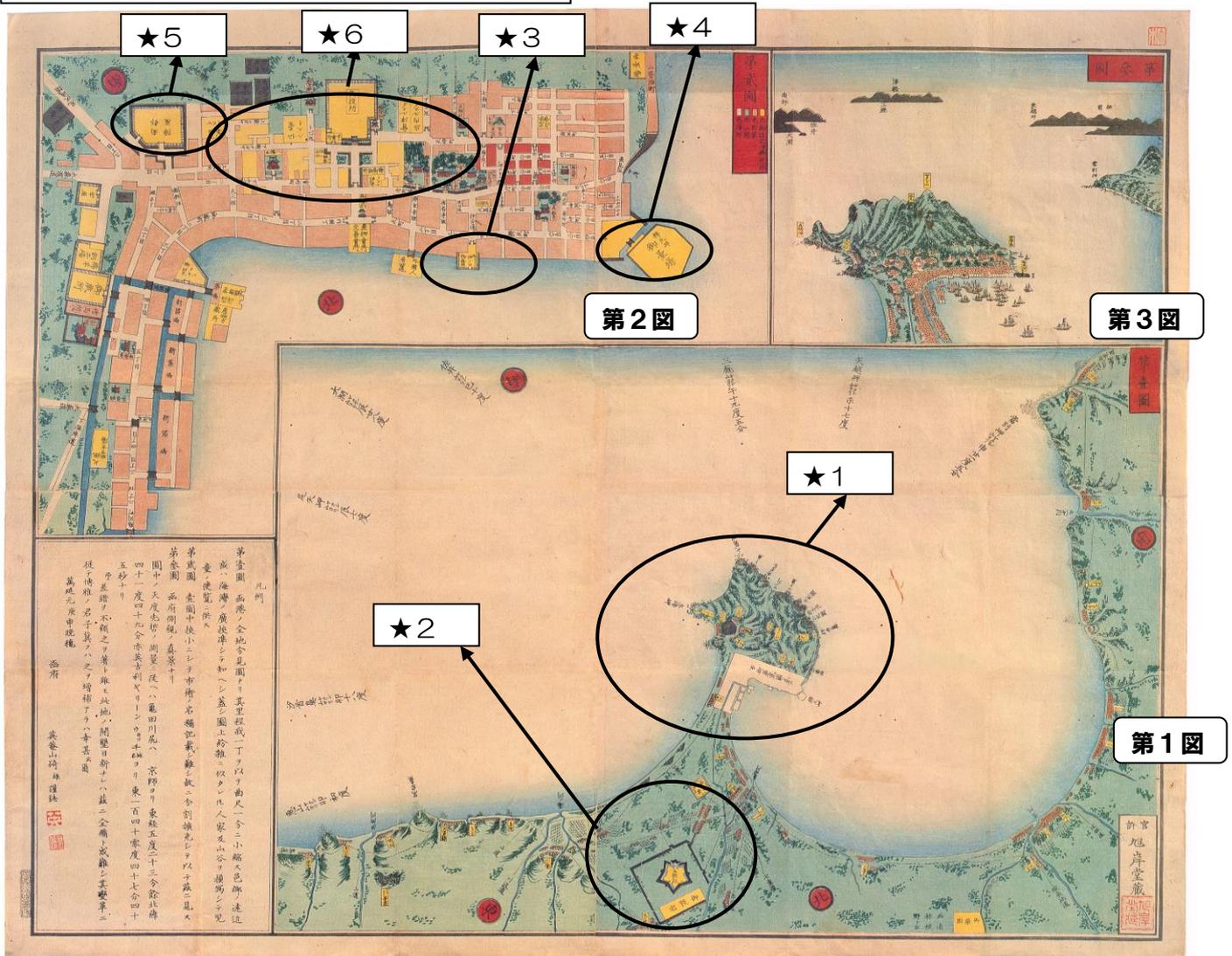
## 授業で使える当館所蔵地図

No. 23 「函館全図」

発売・発行年：万延元年（1860）

サイズ：77×62cm

作者：旭岸堂（蔵）



### 【解説】

万延元年（1860）年に函館図として2番目に刊行された木版図である。3図からなり、第1図は函館山を中心にして東海岸は石崎、西海岸は当別までを描き、「弁天岬御台場・セニザ（銭座）・陶器所（函館焼）」も見える。第2図は、市街地で「沖ノ口役番所・外国人居留地・交易会所」がある。第3図は、函館山の図である。凡例があって、各図の説明を書いている。1854年に日米和親条約によって、函館は開港したが、松前藩の蝦夷地支配に危機を感じた江戸幕府は、1855年、蝦夷地を再び直轄し、箱館奉行をおき、五稜郭を造営した。

### ★1 函館山

函館山は、津軽海峡についでた函館半島の南西部にある山で、海中噴出した火山である。地図では「ヤクシ山」「水元」が表記されており、「ヤクシ山」は薬師山（252m）、「水元」は水元山（280m）である。函館山の主峰は「御殿山」で334mの標高である。伊能忠敬は、ここから東蝦夷地沿岸の測量に着手し、わが国最初の実測地図を作製した。函館要塞の築造が開始されたのは1898年からで、各砲台が順次竣工し、1902年に整備が完了した。1945年の敗戦を迎えるまで戦闘に使用されることはなかった。

## ★2 五稜郭

土塁が五稜星型なので、五稜郭と呼ばれているが、正式には亀田役所土塁という。江戸幕府の蝦夷地経営と北辺防備のために設けられた。1802年以來、現在の元町にあった函館役所を1854年の函館開港とともに、外国船からの攻撃を回避するため、海岸線より内側に築いた。蘭学者武田斐三郎（あやさぶろう）がフランス築城法のオランダ語訳をもとに設計を行った、日本で最初の洋式星形城郭である。全国から4000人以上を動員し、1866年の完成までに9年の歳月を要したが、その後わずか2年で江戸幕府は崩壊してしまった。1868年の榎本武揚ら旧幕府軍に占拠されたことで有名である。

## ★3 浜の口番所（役所）

沖の口番所（役所）は、松前・函館・江差の3港にあり、船舶・積荷・旅人を検査して、沖の口口銭くちこうせんという税金を徴収した。

## ★4 弁天台場

1863年に完成した洋式台場（砲台がおかれた場所）である。五稜郭と同じく武田斐三郎が監督と設計を行い、完成までに7年を要した。形は将棋の駒に似た六角形で、南東端に、アーチ型トンネル式通路の出入口があった。砲台は15門あり、この地で幕府軍と新政府軍との激しい戦闘が行われた。

## ★5 南部陣屋

1799年に蝦夷地警備の幕命を受けた南部藩（盛岡藩〈現、青森、岩手、秋田〉）の陣屋（幕府直轄領の代官の住居、及び役所）である。多い時は、350人ほどの兵が駐屯していたという。戊辰戦争のとき、自ら火を放ち、引き揚げたと言われている。

## ★6 ルスイ

ルスイとは「留守居」のことで、1855年、幕府は秋田・津軽・南部・仙台・松前の5藩に対して、受持地域を分担させ、蝦夷地警衛させることにした。箱館奉行所は、幕府の直轄組織であり、蝦夷地経営と警衛を管轄する。そこで、5藩は箱館詰留守居役をおき、連絡調整を行った。その後、1859年、幕府は仙台・南部・秋田・会津・庄内・津軽の6藩に、蝦夷地を分割し、領分として給与した。地図上にある「ルスイ」は、これら分割支配を命じられた6藩と松前藩である。

### 【利用の例】

#### ○開港後の幕府の外国に対する対応を知ることができる。

- 函館山を要塞（台場もある）として、その後ろに五稜郭をつくっている。
- ・海から来る外国船に対して、函館半島に船をつかせ、中には入れないようにしていることなどがわかる。
- ・第3図を見ると、函館の南に「津軽」が見える。この描き方も警戒していることがわかる。

#### ○開港後の幕府の警備の様子を知ることができる。

- 「南部陣屋」が大きく描かれている。
- ・1799年に蝦夷地警備の幕命を受けたのが南部藩である。
- 「ルスイ」が多い。
- ・ルスイとは「留守居」であり、警備を命じられた藩が置いている。
- ・警備を命じられたのは、仙台・南部・秋田・会津・庄内・津軽の6藩であることが読み取れる。
- ・蝦夷地経営と警衛の二つの役割を担っていた。